

お母さんは、「鬼子丸」

松本康子

海外での子育てでは、日本の時とは異なる経験をしします。その経験を通して、アメリカ文化や日米の違いなど、非常に多くのものを学びます。まさに、「子どもと共に、保護者も育つ」のです。その成長のプロセスを語っていただきます。

目標：高校レベルの読み書き

方法：補習校での学習継続

アメリカにあって、子どもの日本語教育は、高校レベルの「読み・書き」まで続けさせれば、とぜひいたくな事を考えていた。それには、土曜日だけとはいえ、子ども達が補習校へ行くことが、絶対譲れない選択だった。

いつも犠牲になるのは、長女だ。「勉強しなさい!宿題やった?」と口うるさく(もっとひどかったらしい)言うだけで、何の手助けもしていなかった。妹達も、姉が補習校の宿題をする姿をみて、嫌々ながら見習っていた。子どもの自主性を期待した、勘違いに等しい、勉強の仕方を押し付けていた。

次女は、小学校3年生頃になると、補習校の勉強がすむまで近所の子どもと遊ばせてもらえなかったり、土曜日の友達の誕生日にも出席できないと不満を持ち始めた。親の理屈だけで日本語の勉強の大切さを訴えても、子どもはすっかり補習校嫌い、日本語の勉強嫌いになりつつあった。子どもを補習校嫌いにさせてしまっっては、日本語教育の環境を与えるという、最適な方法を失ってしまう事を意味する。子ども達の状況をよくするためには、どうしたら良いかと、悩んでいた。

作文指導

そんな時、次女が宿題に、「運動会の作文」を持ちかえてきた。

側で見ていると、まず、一生懸命何があったか記憶をたどっている。頭の中にある少ない日本語の語彙(言葉、知識)で、どう書いたらいいのか持て余し気味だ。私に聞いても、「自分で考えなさい」と言われると諦めているのか、顔色をうかがうだけで、もじもじしている。いつまで経っても集中せず、書く様子がない。小一時間もしてやっと、なぜ子どもが作文を書けないのか、私のほうがあれこれ原因を考える羽目に陥った。



自分が文章を書くときの手順を考えてみた。すると、テーマ選びにしる、具体的な内容にしる、書く以前に、いろいろな事を頭の中で考えている。家庭でしか使わない日本語でものを考え、それを文字にしなさいと子どもに言っても、大人が考えるほど簡単に書けるはずがなかった。語彙力の問題、また、書くという行為自体、週に1回補習校に通っているだけの子どもにとっては大変な事なのだ、気付いてしまった。また、「作文」

にしても、補習校で書く手順を習ったかどうかと問うと、何の指導も受けていないと言う。

何とか一人で補習校の勉強をこなしてきた長女のように、今後、妹達が日本語の勉強を続けていくことが出来るのかと、自問してみた。それは、今までのように、私が楽をしては、